

響 き 合 い

秋田県

秋水館鎌田道場

小学5年 鈴木羽香

「あつまれー。」

稽古の始まりに館長先生の声が道場内に響き渡る。その声を聞くと私の心はピリッと引き締まって今日はどんなお話が聞けるかな、とわくわくする。私が通う秋水館鎌田道場では稽古の始まりに館長先生が道場生に向けてお話をしてくださるからだ。剣士として剣道に向かう心構えの話から、季節ごとに日本古来より続く伝統行事の話、健康や天気、生活の話などその日によって様々だ。私は幼稚園の年中組の頃から道場に通っているので幼年の頃は内容が難しくて意味が分からないと思う日もあった。その頃はお話後の問いかけに手を挙げて答えると「そうだな」と言ってもらえることがとても嬉しく、その館長先生とのやりとりを楽しみにしていたことが幼年時代の思い出。小学生になり試合の経験を重ねていき、もっと強くなりたい！と思うようになるとますますお話の時間が楽しみになった。強くなるためのヒントがお話の中には沢山詰まっていたので覚えておきたい内容は剣道ノートに書き留めておくようになった。高学年になった今、自宅でそのノートを読み返すと夢中になり時間を忘れる時がよくある。

沢山のお話の中で私が一番印象深く好きな話は「雨と風」の話だ。それは「雨と風はどんな音か？」という館長先生の問いかけから始まる。これは低学年の時にも質問をされてとても驚いた記憶があるので二度目に聞くチャンスが五年生で訪れた時、「あ！この話知っている！もう一度この話を聞けるのだ！」と嬉しくなった。後輩たちが質問に答えている時間に私なりに以前に聞いた内容を振り返った。答えは「雨と風に音はない」で同じだったが二度目に聞いたこの日は感じが全く違ったのだ。

自分の内面で起きている感情が激しい時は表情や動きを静にする。逆に感情が表に現れているときは心を静に出来るような剣道を心掛ける大切さをその日のお話の中から学んだ。その中で「雨や風自体に音はないが、木々や電線、地面や建物などにぶつかって音が生まれるのだ」という説明で私はハッとした。その考えはまるで剣道そのもので、共に稽古に励む仲間たちの存在に通ずる話だと思ったからだ。私一人では何も音を出せない剣道だが、相手がいてくれることで面を打つ音や竹刀のぶつかる音が生まれる。そして三人、四人、と仲間がいてくれることでその音が響き始めるのだと気付いたのだ。もしかしたら館長先生はそんな意味ではないとおっしゃるかもしれない。でも私はそのことに気づいたその日から、今まで以上に仲間を意識して稽古をするようになったことは事実である。

「音」についてはもう一つ私の中で大切にしたい思いがある。他のスポーツは相手に対して声をあまり出さないが、剣道には、「発声」という大切な技がある。剣道に「発声」があることで自分の意志や気持ちを相手に伝えることができ、このことが他のスポーツにはない魅力だと私は思う。しかし「声」は自分の内面を正直に表に出しすぎてしまい私はよく館長先生に叱られる。疲れると返事の声に覇気がなくなり、掛け声が小さくなってしまふからだ。私にとって大きな課題である。道場や試合場に相手がいる環境においてどんな声を響かせるかは自分次第。「自分に打ち勝つ声を持つ剣士でありたい」と改めて強く思った。

私の好きな「こだま、ことだま」という歌にこんな詞がある。『人が人を奏で夢を並べ、傷をなであい、いつか響き合える（中略）泣きそう 負けそう そんな日もあるけど君を抱きしめると強くなれる。』

声を掛け合える仲間がいること、そしてなによりも剣道ができる事に感謝して強い音を響かせながら私は稽古に励んでいきたい。